

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	藤原忠雄
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 富永良喜 副主査：（兵庫教育大学教授） 西岡伸紀 委員：（鳴門教育大学教授） 小野瀬雅人 委員：（兵庫教育大学教授） 市井雅哉 委員：（兵庫教育大学教授） 遊間義一
3. 論文題目	教師ストレスへの支援の在り方に関する基礎的研究 ー性，年代，校種による差異，及び包括的なストレス構造の検討ー
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 藤原忠雄氏から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成26年2月5日（水）13：00～14：30 場所：兵庫教育大学附属図書館ライブラリーホール</p> <p>（1）学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、以下に示す7章から構成されている。</p> <p>第1章 教師ストレス研究の動向と課題 第2章 本研究の目的と意義 第3章 教師におけるストレス関連諸要因の性，年代，校種による差異の検討 第4章 小学校教師におけるストレス構造の検討 第5章 中学校教師におけるストレス構造の検討 第6章 高等学校教師におけるストレス構造の検討 第7章 総合的考察</p> <p>各章ごとの論文概要は、以下に示すとおりである。</p> <p>第1章では、我が国の教師ストレスの状況として、教師の精神性疾患等による病気休職者の現状や教師が向き合っている、多様化・困難化している生徒指導上の諸問題などが概観された。また、本研究で取り扱う概念の整理と教師のストレス構造の仮説モデルの構成がなされた。さらに、我が国の教師ストレスに関する研究の動向が概観された。</p> <p>第2章では、第1章の教師ストレス研究の概観の結果、①教師ストレスに関して、性，年代，校種による差異の包括的な検討が十分になされていない、②教師ストレスに関して、包括的なストレス関連諸要因間の影響過程の検討，すなわちストレス構造についての検討が十分になされていない、③教師ストレスへの支援の在り方に関して、実証的研究の結果に基づいた具体的対策についての検討が十分になされていない、という3点が問題点として挙げられた。</p> <p>第3章では、上記の問題点①を検討するために、ストレスサー，ストレス反応，ソーシャルサポートを測定する尺度を用いて、幼稚園，小学校，中学校，高等学校，特別支援学校の教師を対象に質問紙調査が実施され、性差，年代差，校種差が検討された。その結果、以下のことが明らかにされた。</p>

第一に、ストレッサー、ストレス反応、ソーシャルサポートにおける性、年代、校種による差異に関して、次のような結果が示された。

- ・女性は男性よりストレス反応が高く、40代はストレッサー及びストレス反応が高く、ソーシャルサポートが低かった。
- ・校種差に関して、ストレッサーに関しては様々な差異が見られ、ストレス反応は高等学校が高く、ソーシャルサポートは小学校が高かった。

第二に、ストレッサーとストレス反応との関連性と、その性、年代、校種による差異に関して、次のような結果が示された。

- ・各々のストレス反応へ影響を及ぼす種々のストレッサーが明らかにされた。
- ・男性の「仕事のコントロール」の不全感、女性の「対人関係」の悪さは、ストレス反応へ影響を及ぼす重要な要因であり、その影響性の大きさに顕著な性差が見られた。

第三に、ソーシャルサポートのストレス反応軽減効果と、その性、年代、校種による差異に関して、次のような結果が示された。

- ・「上司からのサポート」は、女性の全てのストレス反応、40代の全てのストレス反応を軽減させるものであり、その有効性と重要性が明らかにされた。
- ・職務ストレスの軽減という観点からは、「家族・友人からのサポート」は「上司からのサポート」及び「同僚からのサポート」に比べ、その有効性が見出せなかった。

第4、5、6章では、問題点②を検討するために、小学校教師、中学校教師、高等学校教師の各々を対象に、ストレッサー、ストレス反応、バーンアウト、情緒的支援、自己効力感、コーピング特性の6要因間の関連が検討された。その結果、以下のことが明らかにされた。

第一に、各校種におけるストレス構造に関して、次のような結果が示された。

- ・小学校、中学校、高等学校のいずれにおいても、基本的ストレス過程である「ストレッサー → ストレス反応 → バーンアウト」が要因間の関連の基盤であることが確認された。
- ・基本的ストレス過程に情緒的支援、自己効力感、コーピング特性が緩衝要因として作用していることが示された。

第二に、6要因の下位尺度間の関連に関して、バーンアウト予防の観点から次のような結果が示された。

- ・小学校、中学校、高等学校のいずれの場合も、児童生徒理解とその指導援助に関する自己効力感の高揚、及び職場における情緒的支援の充実の重要性が示唆された。
- ・各校種の教師のメンタルヘルスへの支援の在り方を検討する際の貴重な指針が得られた。

第7章では、問題点①及び問題点②を検討した第3章から第6章までの結果を踏まえ、問題点③に関して検討を行うとともに、教師ストレスへの支援の在り方に関する総合的考察が行われた。そして、本研究の限界と今後の展望について述べられた。

(2) 審査経過

審査過程は、次の3点に集約できた。

① 研究目的及び論文構成

我が国の教師ストレスの状況と教師ストレスの研究の動向を概観し、教師ストレスに関する研究の問題点を3点に整理し、その各々の問題解決を研究目的としている。問題の所在から導き出された研究目的であり、その設定は妥当であると判断されるとともに、論文の全体構成との整合性も確認された。社会的背景を踏まえ、先行研究の吟味の下に、教師ストレスへの支援の在り方に関する具体的な提言を行うという喫緊の課題に向けた取り組みであり、その研究意義も高く評価された。

② 研究方法

分析の手続き及び結果の記述に関して、客観的かつ論理的に詳述されていたことが確認された。教師ストレスの性差、年代差、校種差の検討では、第一種の過誤を避けるため多変量分散分析が用いられ、小学校、中学校、高等学校教師のストレス構造の検討では、まず共分散構造分析でモ

デル全体の適切性が検討され、その結果を基に下位尺度間の影響過程が検討されるなど、分析は丁寧かつ適切に行われていた。適合度指標の数値がやや低いとの指摘もあったが、教師ストレスへの支援を検討する際のストレス構造モデルとしては、十分に価値のあるものであることが確認された。

③ 独創性と発展性

本論文では、教師ストレスの性差、年代差、校種差が明らかにされるとともに、小学校、中学校、高等学校教師のストレス構造が示され、教師のバーンアウト予防への支援方略を検討する際の指針が示された。喫緊の課題である教師のメンタルヘルスへの支援の推進に寄与できる点が高く評価された。また、先行研究において部分的に検討されていたことを包括的な視点で検討を行った点、及び同一の構成概念を基に小学校、中学校、高等学校教師のストレス構造を検討した点において、その独創性が高く評価された。さらに、本論文の内容を踏まえた今後の実践的な取り組みへの意欲も高く、研究の発展性と研究姿勢が高く評価された。

(3) 審査結果

以上により、本審査委員会は 藤原忠雄 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。